

着任のご挨拶



北海道札幌厚別高等学校長 生田 仁志

4月1日に札幌厚別高校に着任いたしました、生田仁志と申します。

前任の標茶高校、浦河高校ともに総合学科の高校でしたので、本校でも総合学科ならではの特色と魅力ある学校作りができるものと、たいへん嬉しく思っております。

現在、学校教育は大きな変革期を迎えようとしています。世の中が予想を遙かに上回るスピードで、しかも、予測も及ばない未来へと進んでいる現在、将来を生きる子供たちが、大人のアドバイスや規制の枠組みの中でしか生きていけないようでは、おそらく、次世代の荒波を乗り越えることはできないでしょう。そのことは、もう20年以上前に「生きる力」の育成という言葉で指摘されていたことですが、実のところ、その力を学校の教育目標として掲げ、卒業までに目標どおり身につけさせられたかどうか評価している学校は、ほとんどなかったというのが実情です。

平成6年には、これからの激変する世の中を、自分自身の主体的な判断と行動力で生き抜くとともに、よりよい人間関係を築きながら、ともに互いの幸福を追求できるような社会を構成するための資質・能力を身につけさせることを目的とした学科が誕生しました。それが、「総合学科」です。平成34年度から年次進行で実施される高等学校の新学習指導要領では、とうとう、すべての学科において、すべての教科・科目等で、総合学科の趣旨と同様に、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力や人間性」を育成することとされました。さらに、高校を変えるためには、知識の量を優先する大学入試を変えることが必要とのことから、ご存じのとおり、平成33年度入試、つまり、新1年生以降を対象とした大学入試を大改革することとなっています。

大学ではアドミッションポリシーを必ず掲げています。たとえば北海道大学文学部では、「人間社会の多様な営みに対して旺盛な好奇心を持っている学生」「自ら目的意識を持って計画的に勉学に取り組むことのできる学生」「地域社会や国際社会の中で率先して自己の能力を役立てたいと考えている学生」とあります。これらの力を測るため、大学入試問題を改善したり、高校でのどのような取り組みによって、どのような力がついたのか、そのことが大学で掲げるアドミッションポリシーにふさわしいと言えるエビデンスとなっているかを示すよう、調査書も変更されるなど、総合的、体系的な入試改革となっています。そして、それは、総合学科の高校が力を注いできた「総合的な学習の時間」での取組と、そこで身につけた資質・能力の評価を重視するということと合致しているのです。

総合学科である札幌厚別高校は、平成25年に「進学と芸術を重視した都市型総合学科」として誕生した、と謳ってきました。であれば、どの高校より、いち早く、しかも合理的

に、この教育改革の波を乗り切っていくことが求められます。

本校には、明るく元気で、何事にも打ち込もうとする意欲の高い生徒が多くいます。また、指導力や人間力の高い教師集団がおり、そして、本校の教育を支えていただいている保護者や地域の方々に恵まれております。これらの財産を最大限に生かし、本校の目指す生徒像を実現させ、より高く、生徒の自己実現を図れるよう邁進して参る所存です。